

カトリック京都司教区  
ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者  
小教区評議会役員各位

2022年7月12日  
福音宣教企画室

## 2022年小教区評議会役員研修会報告

- テーマ： サイクルテーマ②「教会共同体づくり」  
- 「シノドス・ともに歩む教会共同体づくり」
- 対象： ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者、小教区評議会役員
- 講師： 大塚 喜直司教 奥村 豊神父 小立花 忠神父 菅原 友明神父 一場 修神父
- 日時： 2022年5月28日（土） 14：00～15：30
- 開催方法： ZOOM ミーティング
- 参加人数： 94名（信徒 81名、修道者 2名、司祭 11名） 37小教区 端末数 90  
※zoom画面での確認のため誤差があります。
- 内容： 大塚司教の導入の後、3名の教区司祭が、シノドスの回答作成を通して感じたこと、コロナ禍での共同体づくりで気付いたこと、今後の教会共同体づくりへの思いをそれぞれの視点、考え方から分かち合った。  
最後に一場神父のコメント、大塚司教のまとめを通して、ともに歩む教会共同体づくりについて考える機会とした。

### 導入 大塚 喜直司教

毎年、春と秋に行なう、役員研修会・交流会と3年周期のサイクルテーマについて、及びシノドス（世界代表司教会議）のあらましを説明。

今回のシノドスはテーマが「シノドス(ともに歩むの意)」そのものであり、教会共同体が神の民として世の終わりまでともに歩み、旅をしていくという原点に立ち返るものである。10の質問に回答するプロセス自体が、小教区、教区の皆がともに歩んでいるかを自己検証する今回のシノドスの歩みの一部である。今日は3人の司祭の分かち合いを聴き、これからシノドスの歩みをどのように取り組んでいくか考えてほしい。

### 講話1 奥村 豊神父（三重南部ブロック担当司祭）

それぞれの共同体でシノドスのための回答を分かち合う中で、普段なかなか考える機会のなかった共同体について、皆が真摯に考え正直に語ってくださった。

教会共同体は信仰によって有機的に結ばれた集まりであり、典礼によってその結びつきが強固になる。コロナ禍であっても、集会をやり続けなければ教会共同体とは言えないと考え、できるだけミサを実施したが、教会活動が難しくなり、朝晩の祈りやミサをオンラインで配信した。すると信徒との繋がりがそれまでと違ったものになり、また他小教区や教会以外の人との関わりが増えた。自分の何かが開かれて、新しいことに取り組んでみよう、関わりがなかった人との関係を作ろうと

いう思いが出てきて、それが福音を伝える動機付けとなった。今まで内に秘めていた信仰の思いを言葉にできたり、信徒との関わりの中で見えなかったものが見えてきたり、隠された何かがこの2、3年の歩みに出てきた。神ご自身がイエスキリストによって自己開示されたように、シノドスの歩みの中で私たちも秘められた思いを自己開示していけば面白い教会の動きができるのではないかと思う。

## 講話2 小立花 忠神父（滋賀ブロック担当司祭）

「小立花神父の妄想」という形で2050年の教会を想像してみた。働き盛りの年代の日本人信徒はほとんどおらず、小教区の数も各府県に1つか2つ。外国にルーツを持つ信徒は増え続け各国語の共同体ができるが、彼らは国によりそれぞれ異なる信仰の方法があり、一つになって何かをするのは非常に難しいため、言語ごとに聖堂が割り当てられるだろう。各言語のミサは各府県に1言語の神父が確保できるかどうか。一方日本人司祭は信徒の減少のため給料が賄えず、平日は働きに出ることになる。IT化が進み、各言語共同体との交流はスムーズで、翻訳機などのおかげで各国語の会議もスムーズに進む。各教区の財政は良くないので教区の統合が進む。ドローンやその他の交通網の発達で教会への移動は楽になっている。聖堂の老朽化、自然災害で聖堂がなくなる可能性もあり、集まることができなくなり信者数の減少を食い止められない。

私の共同体づくりは「人」。人を大事にする共同体である。コロナを経験し、教会活動に必要なことと必要でないことが分かり始めた今、新しい共同体づくりに取り組むチャンスである。人が共同体を作るのであり、一人一人が互いを大切にすることが求められている。共同体の中で孤独を感じる人がいる。イエスはそのような人に寄り添う活動をされたのではなかったか。愛に結ばれた共同体こそイエスの教会であり、教会の本質だと思う。部会などの教会活動も「人」を大切にするという視点で捉えて欲しい。教会が新しくなるチャンスである今、教会活動も信仰に基づく活動へと変わるように促されている。信仰の力をいただきながら歩む共同体でありたいと願う。

## 講話3 菅原 友明神父（洛東ブロック担当司祭）

コロナやシノドスを通じて「ミサ」について強く考えさせられた。週1回、ほんの1時間でも、教会がこの場所にありミサが捧げられることがどれだけ尊いことかと思わされる。教会が何十年もの間、ともに歩みミサを続けてきたことによって培われてきた教会の底力を感じている。ミサを続けるということは決して当たり前でも簡単な事でもなく、多くの信徒の祈りと沢山の様々な奉仕の上に成り立っている。コロナ禍で何度もミサが中止になるという未曾有の事態の中で、柔軟に、また適切に対応ができたのも、今まで見えなかった教会の底力が結晶として発揮されたように思えた。今、教会は低迷しているといわれるが、私たちが教会を維持して、毎週1回ミサや集会祭儀を続けることはザビエルの宣教や26聖人の殉にも匹敵するような大切なかけがえのないことである。あるプロ野球チームのホームページに、長く成績が振るわなかった時代の選手たちが「低迷期を支えた選手たち」として紹介されていた。低迷期を支えるということは、毎年優勝する黄金時代を築くことに匹敵する尊い役割である。旧約聖書の時代も同様に、バビロン捕囚などのどん底の時代の人たちが大切な役割を果たしていた。教会の歴史を見ると、いきなりすごい人が現れるわけではなく、一見低迷、衰退ともいえる時が続く、時代のほうが動いて時が満ち、たまたまその時代の人があたかも時代を変えたように見える。今の教会が低迷しているとしたら、悲観したり、自己批判や

反省をするよりも、私たちも立派に低迷期を支える使命を果たしているという自信と誇りをもつことがシノドス-ともに歩んでいくうえでわたしたちの方向性になるのではないか。

### コメント 一場 修神父（福音宣教企画室担当司祭）

3人の司祭の話が全く違うことに驚き、まさに聖霊の働きであると思った。同じ信仰がそれぞれ異なった言葉と視点で語られ、それがまた一つのところに収束していく素晴らしい分かち合いだった。それぞれにコロナ禍の中にあった時のしるしを読み取り、信徒と一緒に司牧しようとしていることを感じる事ができた。

奥村神父は、教会の本質(集まること、コミュニオン、エクレジア)の大切さ、コロナ禍で神の自己開示を共同体が一緒になって明らかにしていくことの大切さを伝えられた。本当に大切なものは何かを見極めないといけないと感じた。

小立花神父は「妄想」という形で未来の教会について話された。妄想は夢、預言者たちは神のメッセージとして夢や妄想から未来を見た。それは私たちにとって必要なことである。今は転機であり、危機の時ほど神のこと、人のことを大切に深めていくことは聖書にも語られている。

菅原神父は現在の教会の現実をしっかりと見て、週1回、1時間のミサを、典礼部だけでなく色々な人が一つになって続けていることを話された。それ自体がシノドスであると感じた。低迷期をじっと耐えて支え、次の時を待つ。教会は低迷期に成長する。華やかな時は思いあがっている可能性があることは歴史を見ればわかる。

3人の司祭は共通して、低迷のおかげで本当に大切なものを見極めることができると言われた。

神の民としての教会の力は「人」なのだということも低迷している今だからわかる。

夢を見、妄想しなければならぬ、同時に現在の支え合いが見えていないといけない。そのためにはお互いに感謝が必要である。確かにコロナ禍の困難、苦労はあった。しかし失ったものは何もなく、得ているものがある。「得たもの」を考えてほしい。

### まとめ 大塚 喜直司教

コロナ禍での分かち合いと回答の作業への皆さんの熱意に心から感謝する。

この二年余り、「自分の信仰を問い直す」ということに気付かせてくれたのがコロナであった。そしてミサがどれほど信仰生活の土台であり、頂点であるのかということを経験した。また、世界に目を向けるとコロナだけではなくウクライナ情勢など、平和とは何かということも考えさせられる。21世紀にこれまで思ってもみなかった状況を生きている私たちは、教皇フランシスコが言われたように「私たちは皆同じ船に乗っている。誰も降りることはできない」。この船はどこに向かっているのか、私たちの歴史、神の計画、その中で生きている事実、あかしについて見つめさせられる時であると思う。

今年は元和の大殉教のうち長崎の大殉教、来年は江戸の大殉教からちょうど400年にあたる。キリシタン時代は250年間ミサがなかった。秘跡はなく、信仰のゆえに命が危なかった時代に潜伏キリシタンは祈り、励まし合い、信仰を守り抜いた。お手本である。教皇フランシスコが呼びかけられた「ともに歩む」ことの深い意味、そこからの気づき、聖霊の働きをより一層感じながら、二度とない「今」の気づきを大切に、全世界の教会と共に京都教区もシノドスの歩みを深めていきたい。

### 福音宣教企画室ふりかえり

今回の研修会もオンラインで開催し、100名近い役員の方々が参加してくださいました。コロナ禍も3年目になり、いろいろな困難やチャレンジが続く中、さらに「シノドス」の呼びかけを受け、教会共同体は、どのような「共同体づくり」に向かって歩むことができるのでしょうか。今回は、実際に小教区で司牧されている3人の司祭から、教会共同体づくりについての思いを語っていただきました。それぞれにユニークなお話を聞かせていただき、参加者の方々からも積極的な感想が届きました。3人の司祭方の話を通して、内容や司牧の視点、アプローチは違っても、同じ信仰で結ばれている深いつながりを実感し、この研修会も「シノドス」の歩みのプロセスであることに気づかされました。秋の交流会では、今回の研修会の「ともに歩む」体験を、さらに深めていきたいと願っています。

役員研修会振りかえり⇒資料参照